角力
仇討
蔦之寄生

十三
十四

へ13
3335
7

諸術道之奇生巻之拾之

目録

一 龍田の山大入道ふしぎ
微かる事

参議栄
大正十六年八月廿九日寄贈
本大學出版部
門 へ 13
號 3335
巻 7

新納道之奇生巻之揺之

龍田ハ天人関西男の塚

佞奸邪曲ハ一旦甚しく

しいへども終に其所に

かならずしもやされ龍

日ハ中天八てあのゝちグカ量

ゆくしき天剣ゆゆしも修羅の
の衢ぞ梶川と除かくて、そのかの
角力まさあのまつくとは着て
なきしこうづのしがたき隠しく
訴へしは、なぐるそのかの偏なるの
国にもあの中の山にゆくへ出しまりぬ
角力梶川となまへも大ひよ
利運よそ申しも、そうつはる門前誉

の手綱ゆくしも不息後を
携へ所のさ染がある廷く
面しかも源氏山今は染て
三んの梶川遺恨とてふら
きんと脇とぞうそうしく待
その名が大八元源氏山よ
乃ちぞ御手本が納め鐵よ
左右婦人と搦へ其後角力

小袖ざくらうづ其ちらし
日数も経ける中へ源氏山に
ぞかれ正月半過へ越し
うば大八大夫にあゆびやれら
我ばかりめぐりて東へ
叢京河原のごとく
御進角力は奥行有る
大八がしきまに西側ところ

側の大関星兜道為
ろく国道の角力なり抜
前白里ありん手角力
望ろく五郎くんぐ
来る九月二日より大関ざ中
の組なる里へ御西ぐるの
大関為川に抜年
かく河里しうば龍日ものと

名代しく五絃を尽さる
さしゆかしき所に御坐ます伊勢白氏
萬く星覚が力量勝れ
まし恐多く大八法しくと
おもひしやるに中々に楽り行
うちなせし秋の夜の風に面をて
お遠たしてこらむとせよ
あるの時に是なきの勝るしぐ

となりて御まさただしくて五絃
もとだにすし諸人の中の瑞よりめ
らん事給ひなり行くぞ
能く曲がはなし楽に勝べき
律の手まやして気に尤
ぞしかららんかわしせそすぐ
勝りしに癖の曲も世の旨
し今なりとあるまへ筆しげ

其今の指南と白銀たまはり
みくさを添へて行かへ
ふ彼の星兜が誇りける
筆用に仏にしか折けり兜
東西に赴き何里しかずに於て
と書けり何年中しかと座敷へ
三年大八郎都にて大八
捨取得しるしなるに付くとも

此今寺の峰下の東寄り
何かし此所竜川に来る三日
日本紀の名を取り遂に此処に
竜川掃除し神にて
ゆり三十来ずし名代にて
これをはれつき掃るる
見に来ての角力ゆくすぐ
寺読にて川に生はゆくず中りく

つゝ手箱をとりいだしふたをひらきみれば
いかにもきよらかなる
申しける和尚はいかにも御ぶんの
鏡は済ませ給ひつゝ当座にて
前後の次第を仰せける
角の小袖をたづさへ
ましてものゝ[illegible]
一体のよし和尚[illegible]

ましまし候ひけるに手箱を
みなもつて御心のまゝに座
なさけをかけて給へと
御ぶんの[illegible]
御ひかへの文をとりいだし
まづみよとて金子に白銀
とりそへて[illegible]道具
さしそへ給ひつゝの[illegible]せて

営く御座とかくらふ
うらみはなく今一両年のうち
みちに於て義成とも相叶ふべしと
ないて候ば御事の事すれば大八が
よしなき事を足にとらせてらへ
んとしふかりなきしの文
然れども拙者の事ながら事
なかれば事の細しも御其の

義なる時の運にしたがひ
ものも大事にして関東のへだてく
もうるまじき身にて大事なれ
ざりきこそれは是非の事
何とく奔走せしめんやら
まして丁寧なる心を勤め
まさにかくれども心志のあり
なかれば夏の細の中なる

しかるへくて五條の前にてい
み[illegible]にこそ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大八たひは[illegible]して
海のおもて[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

判じて祥集となして論
集りさまるゝ時刻かうたり
あれば東の方の星晃在讃
たき入られば西の方のこの
関孫龍が入て山大八郎く
乞像へ入星晃たて丈六寺
のくわじ姫をまつくむ
日暈荒りしらくきこえれど

見聞の法人大八郎く
御しきこそのたしれば星晃
母て行しくはふ屋さやと
かしそはのんどくえ舞を双台
手ちなとじ頭の惑見と
引くにしく左右て母に將合
高星されさ萬しやたさ
しきなれだとしてへし

のゑうくとりしく組合しのく
たらひまてく勝負もつくさでて
末の世日本の流人て達磨
しみ手もさらんとうとうぞ
の手わうて星兜を絶て
ふりそ絶じぬにて帰り
の詞かくいつまた入其中の
ところに向ふひし声の跡く

人知れず線手の名さらずし
とりりく星兜が河ぞならは
手てしのまま面とて源氏の
星兜も眠くてしかし例とんで
あそうわれは大八くしかつく
招くらき儀の御人招かす
まてぞ手の物番くてあれは
知らん星兜も何のつまつく

あまつさへ首をたゝせすゑおきて
縁もなき大臣の因果も
いかれ御はからひぞや浅ましや大八
が刀振りあげのゝしりけるが
これと答へたりし其日の身力
ふせられ給ふみちたゞ身力を
言ひちらしたる見ればかの星兜が
死骸をとくとくの手をくたれ

もろく死骸をとりまはる
御ろくその星兜が死骸の
たゝりのけだかふしぎなる
深き行で御星鏡りに寄る
六金使ひうたゞ読み申さむと
まくきくかれ手ちうが名残
小袖く掛けて手掴みてきき
あゆりしく額つゝ拝みたへける

是も桂川にて龍宮へまいりける
比興の振舞はしらしくるを
もしぬるを是非なく拯
京都の角力海へはいりて
門弟にても甚すくなし
御入なる

新編伽之奇出巻之拾之終

新編伽之奇出巻之拾四

目録

一 桂川龍宮へ行飛脚の事
　并松前の商人物語の事

一 松前にて瑞ける角力の事

諸術篭之奇生巻之指南

桂川龍白玉山の行衛
見届る事
并 桂川和の商人物語の事
字小桂川重次郎より分限目
見る家の勤そふ人へ奇獨の縁と成

量は海よりも須弥のいたゞき
くらかうしんに西道もせうし
しめだ合を天照の笑みを
とまいり暦し緒り源氏
山ても勢ごし絵あひろり時り
重得所南人ことしけ中すて
集がしば田南人印のいけ字
いつの里強を一うしなしぬ

は学情ふかきによりて千万若は
しく／＼不思義なる心の
力量くと海に事なりとて
是より法國は世のこく大八
と弾孫御佛は教じ
ト扇し郭じしのこ南人
是は也のく實を顕すり
ノ御まてしまうその秘と連り

うごんじ東西にまかれなく
たへしも経たる千歳に
まじしく信州と源氏山
あへしはやくも白妙さんと
用意をそろへて大八年
南時河國にまんその谷
とかしくびし川流深やし
ゆへにも是にも動かるの寺院や

河のまもかん松栢の前川とそひと
高原の来り放鶴川是は
水紋かんと云文字まつは三名ふ
天列はまでの中なず吹かず
重所是は中所高人へく
向ひく富くをる重ねんとや
天道の人かくかかるやその
云気ふのなからまし郷里

左様ならはいかにけんとう太郎に申
きこへし高人の言葉くたらしたまはん
和しきもの梶原のものなりと
いふ重忠申しけるはまことにさ
なきとは遠ひもよるやら
の人にてもいはしやうや祐経
が事はたゝ根しいけんいのと
おもひ太郎ひたるまゝふ

祐経の申すやうは工藤祐経と申すを
ゆるさん大人とは頼朝ことく
いかに存すへしとふ重忠申
いつはりもなく工藤公をまいらせし
いふも太郎にてありしを
申ものなれと鎌倉殿の工藤祐経の人
とも御所の梶原かしら八
和田義盛ならひにかしこまつて

いつる町中々角力ならじやん
らきこ八代も龍田んに天下ご言
の大宮中々にもあ其風ぬると
みやこハしが酒かりつく
角力も切すてまもいしゆる
トはし渋まくれど槿川
大ひく相びまいして宮西
いかの劔道所へ出房のみにご

御地さみあえりやし古の商人言
へて成程ハして角力の名の絶
中々でれとは法華まりへぶるつく
和中く異なゆ是何のつふ
くハ良のし妻中へ物語り
志てくむの商ひしひしよて
相ひ帳乞たしくあいぬて
主役名年とこ大すもゆかつる紗

しゝあくましのしゆしう
唐けいの通ニき右の高人
御経わしく大人つきしと仰
堀ぬけべしたあしく成を
異しいまう聞しえしふ
あ人足はせすく極の義すう
御りへ三一刻とも御紙く
いかりも大八才地に年

行要ならきふ源氏下けるに
来りし先まよく安しでまゐらく
の年しもこれ行のなきまでに
此度も来り門をしく御紙く
願くも屋しつふ続川て
そまは言ゆ年きても源氏山
さしでは君男とけとを屋
しく桂川生縁所とあん

ここそ先きのかうへにけるく
しくいよいよ明ありさらん
とじ時よ猶川とおもうて大
八ても出歩ぶく成ゝ座は
和も聴す雲の上もさ郷て
拾彩しうまなまさて節
も縁く甚こうへかへつでと
いふ深甚の苦へくこと

霊が有りの振舞たかさぐとの
節する拍たら田ら霊を拾彩
しけ風しいさてゆくし女
極ゆるさし魚のも会
進んで猿見たまし出ること
うや
松前来ゆく有かの半

双林寺に霊山正法寺とは
ひだりに見る高台寺は鷲尾とも
八坂も遠からず見えて
霊山にて道中とも[illegible]
西大谷の路次を経て頓て
祇園へいそぐ八坂の塔
下河原を過ぎ祇園の御旅所
一[illegible]の[illegible]

清水へまうで所々道の辺の
ながき[illegible]中[illegible]
其後霊山[illegible]
祇園への[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かりし給ひし勝負もなかりしを
しけんじゆくはりける
曽我郎つまちとし御遊く
御伽出の御詫つきやすみ
我がゆく奥州の君やしいで
秘らんを申しはるもめ給へ
なをぞれはさし宙所落とく
申しあまりかくてくらし奥州

のつりをみてかうひ候しておはすう
いとしいふ源氏山に四方の大将ひ
小将ひ御らんじて集ずしあまたを
連てかへりは手へよ給ひてし御秘
ゆくてかうをしいふ大八幡をして
御とうをきぬの山をひてうく
宗かんとは思ふそわが宙将
西の大菩薩はさうておはしまし候

東の大寺にしてゑんてい悪から
けんとしふ源氏山我月じ
笛るそまつて悪からの枕と
所へ御笛るさて悪からの
当日やいはするそれとりん輪縁
楽しくるまへ文しまさら
角が里経し読経今日
経しくし遊しく読経五日目く

かへらせ給ふ西の方のけへゆく蓮の
葉としてそのとし東方の
ゆく極楽へせんとの読経
経りん輪も法の読経のかけとど
見てゆく蓮の葉をかへさま
する大日にして極楽寺随
の角菩提かりとてぞ給へ是
とりて、行者てら読経

し浄刹をはなれずして生じけり
他は国土の身雲ありまして引
やうかやう人えひとくこそ
かゝる菩薩の菩薩とまつとのなるを
しいつとしくるの金のあつかひす
利他の無量佛まします
極楽にいたりしてあしたくて智し
まします命じての菩薩の菩提

のみへ接引しすつるの大智
ありん他の極楽と尊めぬまの
いなかのまへる両方の小溜じ空
まゐ縦極楽と證んと尋徳へ
極楽にも飛はげんろん浄土から
證人をも御になかし深くなるん
御もつれ真を縦て南面するじ
なまを大刀のいつもゝ本織か

南海の角力中へ何と云し跡
例へし池の桂川のごとく
絶んじく一條ましてしは へ
学習岩は立も石投ひし
常るさま〳〵両側の嘗ひ
じしもと様しくも浅の事り
絶名ろうがの行まてさなかなるをも
見り頼豊日よ我ら両側の

英雄龍と成し名は作し角力
しても相しが龍を添て肩へけ
しうたれ今を両側よおのづく
大関龍田てよりふさ打かく
左りかつしのにまつさす日ゆを
龍田んてし桂川両人のうう
くさゆぞ笑ゆり么う組く
桂川が握びいまんとおくく

浮世山にこそ大しやうもしほしたて参らせ
ことわりなきやうにて候へども何事の上
みやく猶以将又殊更よろしく御と
此くらゐにかゝるは此度の様子を
殊の外宜敷くるしかるべくと
ともにも候まじく二なき事
おもしろく候へども末の
其の御礼申入候山の末の

まことにもつてこゝろざし霊験
の御さんけいの事はなに
たのもしく候ともこれ見事に候これ
しかるに此事何事も御座候はゞ
其時分にても大かたならず
振舞はさんじ候ふしぎに
うまくしてうけ給候
其志はなき候得

くまたがねらる大八白のよも
ままもゆくしく鶏のまゝく
揃し江角力かりゞつさうし
けく織し車めるし
妙しんにしゆうまた辰経く

角紋筐之音失兎之指南

このほんにおく
かきつけ申
乃事

東京府廳